
日本図書館文化史研究会
ニューズレター

第 83 号 2003 年 2 月 1 日

日本図書館文化史研究会

〒101-8301 千代田区神田駿河台 1-1
明治大学司書・司書教諭課程
郵便振替口座 00170-5-164973

(事務局)

小黒浩司

ファックス

電子メール

■ ■ 目 次 ■ ■

2003 年度第 3 回研究例会のご案内	2
図書館文化史研究 文献紹介	4
2002 年度第 2 回研究例会報告	11
『ニューズレター』原稿募集のお知らせ	14
運営委員会通信	15
次回運営委員会のお知らせ	
前回運営委員会の報告	
事務局だより	16
2003 年度第 1 回研究例会について	
2003 年度研究集会について	
会費納入のお願い	
会員動向	

2002 年度第 3 回研究例会のご案内

2002 年度第 3 回研究例会を、下記のように開催します。

今回の研究例会は、東洋文庫の見学会としました。このため参加申込方法などが従来の研究例会と異なりますので、ご注意ください。

記

- 日 時 3 月 3 日(月) 14 時～16 時
- 場 所 東洋文庫
- 参 加 費 500 円
- 申込方法 参加ご希望の方は、本研究会事務局へ、葉書、ファックス、または電子メールでお申し込みください。
- 申込締切 2 月 28 日 (必着) でお願ひします。
- 内 容

東洋文庫（図書館部門）紹介

東洋文庫は、1924 年（大正 13 年）三菱財閥三代目当主岩崎久弥が設立した東洋学の専門図書館及び研究所である。

図書館蔵書の中核となったのは岩崎久弥が収集した和漢古典籍（岩崎文庫）と、久弥が 1917 年（大正 6 年）購入した中国のパンフレット類・中国関係欧文書（モリソン文庫：中華民国総統府顧問をつとめたジョージ・アーネスト・モリソン(1862-1920 年)旧蔵書）であった。その後、漢籍を中心に東洋学関係書籍の充実をはかり、さらに収集範囲をアジア全域に拡大し、現在和書・中国書・欧文書あわせて約 85 万冊の蔵書を所蔵している。そのなかには国宝 5 点・重要文化財 7 点も含まれている。

岩崎文庫、モリソン文庫のほかに特徴ある資料群としては、甲骨文字片、中国地方志、中国族譜、チベット・蒙古大蔵経、また世界各地に所蔵されている敦煌文書のマイクロ・フィルムなどが挙げられる。また、アラビア語、ペルシャ語、トルコ語をはじめとして、アジア諸地域の特殊言語の資料を豊富に所蔵していることも特色の一つである。

このような蔵書の特色を持つ東洋文庫は、世界で五指に入る東洋学の専門図書館として、日本のみならず、世界の東洋学の発展に貢献してきた。閲覧にあたっては、身分証の提示が必要であるが、図書館、東洋学研究者の紹介状があれば閲覧証を作成することができる。資料の検索にあたっては、冊子体日録が刊行されているほか、近年ではインターネットでも多くの資料が検索できるようになっている。なお、昭和 23 年（1948）、第 2 次大戦後の経済的困難を乗り切るために国立国会図書館の支部組織が付設され、今日にいたるまで東洋文庫の図書館業務の遂行に貢献している。

（大沼宜規：国立国会図書館支部東洋文庫）

(案内)

所在地：〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-21

電話番号：03-3942-0122 (図書関係)

FAX 番号：03-3942-0258 (代表)

交通手段：JR 線及び営団地下鉄南北線駒込駅

または都営地下鉄三田線千石駅より徒歩 8 分

HP アドレス：<http://www.toyo-bunko.or.jp/index.html>

なお、来年は財団法人東洋文庫の設立 80 周年にあたり、その記念として来年末から再来年初にかけて下記のとおり、丸ビル内にて展示会が予定されているので、そちらもあわせて御覧頂きたい。

江戸開府 400 年記念・東洋文庫 80 周年記念

世界の中の江戸・東京 80 展 (仮称)

期間：2003 年 12 月 23 日 (火・祝) ～2004 年 1 月 12 日 (月・祝)

場所：丸ノ内ビルディング 7F 丸ビルホール

【図書館文化史研究 文献紹介】

宇治郷毅著『詩人尹東柱への旅 私の韓国・朝鮮研究ノート』東京 緑蔭書房
2002.1 211p 1,300円+税 ISBN4-89774-252-8

本書は、近年韓国、中国で高く評価されている詩人尹東柱(1917.12.30-1945.2.16)を中心に、これに著者の年来の研究テーマ、朝鮮図書館活動の歴史的展開に関する研究成果を合せたものである。大部分は、1974～99年の間に図書、雑誌等に発表した論文を収録する。

本書の主人公尹東柱は、現在の中国東北地区吉林省間島に生れるが、やがて日韓両国にとって不幸な日本統治下の時代(1910-45)に来日し、最初立教大学に入学するが、まもなく京都の同志社大学に転じる。やがて、朝鮮独立運動に関連して逮捕され、戦時下の内務省による厳しい取調べを受け、第二次大戦が終了する直前の1945年2月、福岡刑務所内で獄死する悲劇的な人生を送る。満27歳という薄幸の一生であった。彼の唯一の詩集、『空と風と星と詩』は、彼の多難な生涯を送る間の折々に綴った数々の詩をまとめたもので、1955年2月、死後10年を記念して遺稿詩集として友人達によってソウルで刊行された。

著者は、朝鮮民族の戦前期の不幸な歴史を一身に背負った一人の青年詩人の運命に思いを致し、同窓の後輩として深く哀惜する。その思いが本書の行間に滲み出ており、読むものをして肅然と姿勢を正す思いがする。朝鮮古来の言語と姓を否定する同化政策は、今日の日本人にとっては理解もできない愚行であった。その意味で、一つの民族が他の民族を支配することがいかに痛切な悲劇を生むものか、を改めて思い知らされる。本書刊行に際して、2001年6月現在で著者がまとめた「尹東柱研究著作目録(日本語文献)」(p.64-72)も収録、労作である。

内容は次の6章から成る。

1. 尹東柱研究
2. 韓国図書館史研究
3. 在日韓国・朝鮮人史研究
4. 同志社と朝鮮
5. 紀行
6. 国立国会図書館のこと

本書の中心テーマは、次の3点に集約できる。もちろん第1は、書名にもなった詩人尹東柱で、第1章に取上げる。あわせて、第4章前半で扱う朝鮮人詩人3人の一人としても取上げる。第2はキリスト教、特に在日の朝鮮民族、第3が韓国図書館史である。

第1のテーマは最初に紹介したが、詩人の実弟尹一柱(1927.12-1985.11 元成均館大学校建築工学科教授)との詩人をめぐる親密なる交流で、このことが「故尹一柱先生の思い出」の本書初出の追悼文につながる。ちなみに、1983年10月、同氏

の編集する『尹東柱全詩集 空と風と星と詩 改訂版』（ソウル 正音社）が刊行され、翌年の1984年11月には日本語版が出た（全訳本 伊吹 郷訳 記録社）。

第2のテーマ、キリスト教は今日の韓国にとって重要な地位を占めるが（約1,200万人。うちプロテスタント75%。1995年）、朝鮮半島で普及するのは18世紀中葉、中国から伝来して以来のことである（ちなみに、日本では現在新・旧教徒合せて約100万人）。それを受けて、社会・経済的にも閉塞状況にあった戦前期、特に在日朝鮮民族のある者にとり、キリスト教は一つの光明でもあったろう。第3章で扱うのはまさに「戦時下の在日朝鮮人キリスト教運動」であり、あわせて同志社女学校に学んだ朝鮮人キリスト者「金末峰」論（第4章の後半）である。ここにも、同じ学び舎に育ち、同じく神を奉じる著者の琴線に触れるものがあつたのであろう。

一方、著者は長年現職者として図書館界にあり、また長い日韓文化交流史の観点から韓国の図書館活動について関心を維持して来た。その研究成果（1987-99年）4点を再録するのが第2章である。これは、韓国図書館活動の先達、李範昇と朴奉石を紹介①、古代から現代に至る朝鮮図書館史②、戦後の韓国公共図書館史③、および最近の読書推進運動④から成る（p.73-119）。今日、著者は日本で韓国文献を駆使して韓国図書館を論じることのできる数少ない研究者の一人である。その意味で、豊富な人脈と文献資料に基づく本書の論考は貴重である。

最後の第6章では、著者が在職する国立国会図書館について、母校後輩の司書課程学生を対象に講演したもので、これは最初『同志社時報』52号（1974.9）に収載された。入館後、所属した閲覧、参考業務、そして関西館・電子図書館・国際子ども図書館など当面する3大プロジェクトについて格調高く、しかも分かり易く論じたもので（いずれも本年、本格的に稼働開始）、傾聴する学生達の姿が目浮かぶようである。

なお、本書の第4章の前半は、1995年2月、尹東柱没後50年を記念して、後輩の同志社出身者を中心に大学キャンパスに詩碑が建立されるが、その際刊行された下記の出版物の該当部分を再録したものである。

尹東柱詩碑建立委員会編『星うたう詩人 尹東柱（ユン ドンジュ）の詩と研究』東京 三五館 1997.2 331p.

宇治郷 毅：同志社に学んだ三人の朝鮮人詩人：p.141-49

また、はしがきと目次には、韓国留学生の協力による韓国語訳もある。

筆者は、元国立国会図書館の同僚として、入館以来の著者の活躍を比較的良く知るものの一人であるが、本書によって改めて著者のリベラルな発想と朝鮮民族の近代化への苦難の足取りへの深い洞察と理解に感動を覚える。著者が、日韓文化交渉史の観点から、本書のテーマでもある韓国の図書館文化、そして戦前期日本における在日韓国・朝鮮人の問題とキリスト教との関わりについて、一層の研究を進展されるよう祈りたい。

（中林隆明：東洋英和女学院大学）

【図書館文化史研究 文献紹介】

河井弘志著『ドイツ図書館学の遺産 古典の世界』京都大学図書館情報研究会
 (発売：日本図書館協会) 2001.4 x, 375p 22cm 6,000円＋税
 ISBN4-8204-0101-7

図書館員の専門性を論じて、司書課程の実務知識の範囲で検討してみても高が知れている。手続き的なものや技術的なものが多く、それさえ一応マスターしていれば、専門職であるかのような認識が横行している。それで果たして良いのであろうか。隣接する職域の博物館学芸員資格と比べると著しい相違がある。＜博物館法施行規則＞第9条第1項で「学位規則による学位を有する者」は無試験認定を受けることになっている。「博物館に関する学識及び業績を明示する書類及び資料」の提出が必要だが、司書資格における講習受講を要件とするようなものがない。極言すれば、博物館の実務知識に欠ける面があっても、専門的知識に優れていれば良いとする姿勢である。博物館では、資料展示が第1に為すべき任務とされており、展示には学術的裏付けを求められるからである。教員がカリキュラムを組むのと同じ主体性を学芸員は持たなければならない。そこへ行くと、図書館員は受身である。資料収集段階または提供段階で、どの資料を選択するかは図書館員の主体性が問われることもあるが、パトロン（図書館利用者）の要望する資料という形で、その責任はパトロンに転嫁され、あるいは薄められて、手続き事務に追われてしまいがちである。

河井弘志著『ドイツ図書館学の遺産 古典の世界』を読んで、考えさせられることが多かった

本書は、著者が長年調べてきたヨーロッパ、特にドイツにおける図書館学の歩みをまとめたものである。著者は「はじめに」の中で、砂漠を前進一途の積りが、いつか出発地に戻っていたという寓話を引いて、今日や明日の図書館サービス論に熱中するあまり、先人の遺産をゼロにする愚を戒めていて「消えていいものと消えてはいけないものを見分け、価値あるものを受容し、未解決で放置されている問題の解決にとりくむ謙虚さを持ちたい」という彼の課題意識を告げる。

「序論ドイツ図書館学史の先行文献」では、大佐三四五の『図書館学の展開』がシュレティンガーやゲッティンゲン大学図書館学講座以来のドイツ図書館学を入りに置くと指摘し、ついで椎名六郎、岩猿敏生そして著者の師小倉親雄の業績を挙げて、日本人の先行研究を「かなりの成績」と評した上で、ドイツへ留学して丸一年原書を渉猟し、必要文献を収集した成果の中味の紹介からはじめる。学識史や図書館入門書のなか及び単独の図書館史の試みを摘記したのち、図書館学に関するケルン・コロキウム（1970, 1985）まで点検する。別に図書館学者の人物研究にも触れる。

本論は次の6章から構成されている。

第1章「学識史の時代」では、図書館学の源流としての学識史の吟味から入る。

漠然と、というか、素直に、というか、「学問の歴史」では済ませない状況が 17-19 世紀の啓蒙主義精神の下ではあったと説く。「学問の起源と展開」には違いないが、「しっかりと図書の形で著述し、順序だてて講義する値打ちのある知識の総体」とヨハン・ゲオルク・モイゼル (1743-1820) は定義した。マルティン・シュマイツェル (1679-1747) が「学識の歴史であって図書の歴史ではない」とのべたにもかかわらず、18 世紀末には「学識史の主要部分は図書の歴史となり、最後はほとんど解題書誌に等しい概念になっていく」と著者は指摘する。学識史の枠組みには種々の説があったが、著者はダニエル・ゲオルク・モールホーフ (1639-91) 著『博識家』(3 巻 1688-95) をやや詳しく紹介し、「基礎的学問方法論であり、一般論から専門文献まで学問の方法と基本文献の紹介」に努めたと評価した。「図書館員」と題した第 1 部に図書館利用法・学術誌・目録・著作家・批評家・抜粋法・演説法を含め、第 2 部で哲学史・科学史、第 3 部で「応用知識」として倫理・政治・経済・歴史・神学・法学・医学の主要著述家紹介にいたる。ゴットリーブ・シュトレ (1693-1744) の『学識史入門』(3 巻 1718) は当時の大学 4 学部制のリベラル・アーツ諸学科概説となっており、学問の第一歩は読書と、読書論から導き、伝統や権威を排した合理主義を説く。しかし学問方法論では記憶と図書の知識依存を脱しきれず、合理的思考に届かない。その上に立つ図書館論も萌芽的で、蔵書が貧弱でも貧しい人々への公開とか、件名目録の有用性とか、光る言葉を挟むが、図書館に関する記述は淡白という。ミヒャエル・デーニス (1729-1801) 著『図書学入門』(1777) に至って文献史の域に進む。しかも舞台は図書館、主役は蔵書である。図書・図書館史の最新時代 (印刷術普及以後) では各国各図書館の図書館員の名前が丁寧に紹介され、主要な者だけでも 55 人は存在する由。著者は「デーニス自身の図書館員としての自負」と「専門職図書館員の地位が確立される時代相を反映する」との見解を示している。続く図書館蔵書と収集選択論、整理論、図書館員像も新味がある。以上の第 1 部図書学の後に第 2 部文献史が神学、法学、哲学、医学、数学、歴史、文献学の順にそれぞれ史的に記述されたとある。学識史期を代表する 3 人の人物モールホーフ、シュトレ、デーニスは大学教授であっただけでなく、図書館に勤務した図書館員でもあった。「学識史の図書館論が図書館員に受け継がれることによって、図書館学の独立の道が開かれた」との著者の最後の一行は重みがある。

第 2 章「図書館入門」は 4 種の図書館入門書を掲げている。まずドイツ最初のドイツ語による市販図書館ガイドブック『新しい図書館』(1702) は匿名だが、出版者ベニヤミン・シラーの編訳らしい。オリジナルはフランスのイエズス会クレマン神父著『個人及び公共の博物館または図書館の建築、排列、管理および利用』(1635) と推定されている。シラーは同書以外にも何冊かの参考書を要約して一般読者向けに編集した。二次的性格ゆえに図書館学史では殆ど無視されてきたらしいが、18 世紀初頭に広く啓蒙書として役立った同書を、河井氏は重要と認めた。建築、館員、利用者、マヌスクリプト、有名図書館名など 8 章構成は当時の図書館常識を解説していて興味深い。たとえば図書の収集は寄贈を受けることにある。稀観本を含む大コレクションを購入または寄贈により入手することが眼目だった。日常的個別収

集は殆ど無視された。貴重書といえばマヌスクリプトで、インキュナビュラは稀書扱いされていない。バロック図書館の理想の田園風環境、室内装飾や地球儀・羅針盤、博物標本、諸民族衣装などの配置、象徴する彫像、標語や碑文の刻掲、寓意画の掲示などが詳述されている。そのこと自体は各種図録の中で我われも目にしており不思議ではないが、理屈をつけた説明を読む機会は珍しい。魔法や邪教の書の徹底排除は、スピノザの無神論、神秘主義アグリッパから若者に誘惑的愛の毒を注ぐ書物、名著への誹謗書の類、挙げて否定、保守的である。蔵書構成では神学書の高比率が際立つ。災害で消失したり、戦乱で略奪された蔵書の遍歴を読者の好奇心狙いで詳しく書き連ねながら、肝心の目録記述は粗末で無教養ぶりを露呈。ただし図書館の所蔵データ重視は指摘に値する。館外貸し出しは望むべくもないが、館内でも盗難防止策を懇切丁寧に説き、啓蒙主義時代「保守的な極」と評されている。閲覧者に異端を戒める一方、読書一途を不健康と休息の必要も訓える。図書館員の要件を学識史家に見出し、それは学者に終始し、実務家像がまだ見えない。

次にオイゼビウス・アモルト(1642-1775)の図書館学が「修道院の理性」なる節で説かれている。ミュンヘン近郊の修道院出身の彼は『キリストに倣いて』の著者確認や「苦痛の聖女」奇蹟偽証調査などを通じてドイツや周辺の図書館 50 以上を調べ、そこから体験的に合理的な図書館建築・設備を提言し、聖俗二元分類法や書架目録・著者索引・件名索引をセットとする目録体系を提案するなど、利用者側に立ちながら、かなり実務的で専門職図書館学の原像が刻まれたと、著者は評価した。

60 年後、神学者パウリン・エルト(1737-1800)の学識史的図書館論が現れる。新教諸派、無神論、理神論等を厳しく排除する禁書論を説き、カトリックの秩序に従う分類理論のみを扱い、人物書誌要素に偏る目録論を主張、また彼は件名のアルファベット順排列目録には好意的でなかった。

他方、南部のメミンゲンにいたヨハン・ゲオルク・シェルホルン(1733-1802)はルター派牧師、同名の父(1694-1773)牧師ともに教区監督と市立図書館長とを兼ねた。彼は蒐書を自慢だったが、整頓されていない市立図書館へ客を案内するのは躊躇した。『図書館員・博物館員入門』(1788-91 2巻)を著し、その中で図書館旅行を推奨する。新教徒ながら構わず修道院を歴訪し、彼は文献鑑識に励み、学識家達と友情を育んだ。図書館誌 *Bibliothekenkunde*、即ち諸図書館についての記述が詳しく、図書館の整理や管理には観念的にしか触れていない。マヌスクリプト読解術やインキュナビュラ論が光り、愛書家の図書館論になっている。著者は「愛書という動機のうえに、学識史、マヌスクリプト論、インキュナビュラ論を合成し、図書整理論と図書館サービスの理念を加えた、複合性の強いシェルホルン図書館学には、古いものと新しいものが混在」と言い、そのちぐはぐな特色に歴史的意義を認めるべきか、と評価をにじませている。

第3章「図書館実務論」では、生涯を図書館員として過ごした無名カルメル会修道士の遺した『図書館実務論』(1788)とアルブレヒト・クリストフ・カイザー(1756-1811)著『図書館整理法』(1790)を俎上に載せる。前者は後者に較べ原始的だが、実務者ならではの現実的排架処置、分類法、検索に徹した目録法、図書館管理にお

ける図書館網思想の萌芽が指摘されている。カイザーに至り、学識史の超人的記憶が限界化、業務手順を標準化する姿勢が明確となる。彼による目録規則の提示が図書館学の新時代を招来した。原理「すばやく容易な発見」のカイザー図書館学は「学識史家たちとは全く別の方向から、啓蒙主義の時代の流れに合流したのである」と著者は指摘している。

第4章「図書館学の体系化」では、マルティン・シュレッテンガー(1772-1851)とフリードリッヒ・アドルフ・エーベルト(1791-1834)を対比する。前者が図書館学 *Bibliothek-Wissenschaft* を構想し、定義し、提唱した。「文献要求のすばやい充足」という目的意識は現代に通じる。彼はカイザー規則に独特の工夫を加え、綴字の異なる姓の同姓扱いなどの排列語の思想を導入した目録規則を提示した。分類排架と分類目録を便宜的な効用でしか認めず、カントの範疇論を転用したり、応用しながら、限界への諦観が先に立った取り扱いに終始し、件名目録に力を入れた。図書館管理論は添え物的で、独自財源を欠く図書館側に、利用者から寄付金徴収権や著作無料納本を求める権限を要望するなどの注目される方策も見えるが、概して場当たりのとされる。図書館員養成については、邦すなわち *Land* の中央図書館養成学校設立構想を提言した。世界最初の図書館学校提案といわれている。エーベルトは『図書館員の養成』を書いたが、現場養成主義であった。

対するエーベルトは歴史主義に立脚し、「相当量の蔵書」で図書館の概念は尽くされると断言、野次馬しか利用せず、整理の不備な図書館を図書館と呼べないなら、古代から今日まで図書館は存在しなかったことになる論駁した。従って図書館は後世へ価値ある資料を伝えるのが第一任務で、当代の利用は二義的とした。彼とて1811年「この施設で権利を持つのは図書館員ではなく個々の来館者」と『公共図書館論』で説き、近代性を評価されたのに、10年後『図書館員の養成』では父親から継承した敬虔派の信仰の故か、自己犠牲を強要するばかりで、理念を確立せずに終わっている。

第5章「展開期の図書館学」に進もう。①ヨハン・クリストフ・フリードリッヒ(1775-1836)の分類論、②レオポール・オーギュスト・コンスタンタン(1779-1844)の『ビブリオテコノミー *Bibliothekonomie*』、③ヘルマン・ルーデヴィッヒ(1809か1810-56)の図書館経済学、④エドムンド・ツォラー(1822-1902)の『図書館学梗概』(1846)他、⑤ユリウス・ペッツホルト(1812-91)のヒューマニズム図書館学を中心に扱う。ここでは、①には触れない。②以下へ流れるフランス人コンスタンタンの提起したビブリオテコノミーのドイツ的展開は啓蒙主義から人間性の尊重へ導いたと言う。

第6章「図書館学教育」は、カール・ツィアッコ(1842-1903)のゲッティンゲン大学における図書館学講座開講、プロイセン目録規則草案の成立などによってドイツ近代図書館学の形成を告げる。一歩下がって補助学の名称で学識史の伝統が一翼となって収まっている。

「結び」で、伝統的学識史に対し啓蒙主義図書館論の発生が、始めは素人の利用体験伝授型、後には実務家の技術開発型への平行で見られ、19世紀に専門職養成の緒

口を醸成した。ここへ来て、著者は歴史主義を合理性の否定者と見るよりも、人や地域の多様性を許容する「深みのある図書館を育てた」と評価、書誌情報の在り方をめぐる諸検討を要約し、あるいは利用者の権利と図書館の倫理とを考察して「ヒューマニティ」の理念に光を当てよと説く。最後に「情報学は図書館技術の一領域なのか、それとも図書館学は情報学のなかの一領域なのか」、図書館学や古典文献学の尊重、図書館学から社会学への着眼点移行と重ねて、ドイツ図書館学の軌跡を重く位置づけている。

30年ぐらい前に、科学史の友人に誘われて大学史研究会に参加したことがある。その際、図書館学が大学で講義されるようになったのはいつか話題になって、学術年鑑『ミネルバ Minerva』の1890年代に載るドイツの大学の図書館学講座の説明を求められて弱った記憶がある。メルヴィル・デューイの図書館学校がコロンビア大学内で1887年に開設され、英国では図書館協会が資格試験を行っていたと読んでいたし、ドイツ事情は弥吉光長氏にシュレティンガーやミルカウの話聞いていたが、解説するほどの知識がなかった。河井氏の研究は学会誌に書かれた段階から大部分読んできたが、今回体系立って通読し、大いに歴史の重みを感じた次第である。

図書館の専門職に立ち返って、学識史的側面の重要性をもっと強調すべきだと考えている。昔の学識史と内容が同じでよい訳はないが、主要学術分野の学説史に通じることは必要であろう。哲学史(思想史)、実態史(例 社会経済史)の両面を人文・社会・自然そして文学の各分野に付き、できれば世界と日本に分けて学び、一定の知識の蓄積を立証すべきであろう。これは講義を聴かなくても良い。独学でも可能だから。また図書館見学も必要である。注目すべき点を決めて建物だけでなく活動全体を知ること重要である。唯我独尊であってはならない。図書その他の資料の生産・流通の現場を知ること重要であろう。まだまだ挙げるべき事象は多いが、この際はこの辺でとどめよう。

なお本書の基礎は手作り本(1998年初版、2000年改訂版)があって、インターネット版もある由。冊子体では一部省略して本書になった旨記されている。今後はこの種の手法が学術書刊行にはもとめられるのかもしれない。

とまれ、ドイツ図書館学史についての本邦最初の単行書を見事公刊された著者に、満腔の敬意を表すとともに、20世紀の変化、展開も整理して纏めて頂ければと期待する。

(石山 洋：元国立国会図書館)

2002 年度第 2 回研究例会報告

実施日：2002 年 11 月 17 日

会場：明治大学駿河台校舎研究棟

【発表 1】

三浦 太郎（東京大学大学院）

- 発表題名

戦後占領期日本におけるライブラリースクール創設の経緯

- 発表要旨

発表者は 2001 年、アメリカ図書館協会（ALA）に保存される記録文書（ALA 文書）のなかの占領期日本に関連する箇所について目録化を行った（『戦後アメリカの国際的情報文化政策の形成』（占領期図書館研究第 2 集）研究代表者根本彰，東京大学大学院教育学研究科図書館情報学研究室，2001，p.73-135）。そして 2002 年はじめには根本彰氏と共著で、この ALA 文書や GHQ/SCAP 文書などの 1 次資料を用いて JLS 創設の経緯を紀要論文にまとめた（三浦太郎、根本彰「占領期日本におけるジャパン・ライブラリースクールの創設」『東京大学大学院教育学研究科紀要』vol.41, 2002, p.475-489.）。本発表では主にそのときの考察に基づきながら、まず日本における図書館学教育の状況について押さえ、そのうえで日本にライブラリースクールが創設される過程をたどった。

戦前、日本では図書館関係者のあいだで図書館管理や図書館運営といった概念こそ把握されていたものの、文部省図書館職員養成所のほかに教育機関のなかで図書館学を講ずるための制度化は行われていなかった。終戦後も、早くから日本側の発意で同志社大学図書館学講習所や京都図書館学校などにおいて図書館学講習が始められたが、これらは旧来の図書館員養成を展開したものであり、いまだアメリカのライブラリースクールのように図書館学という学問体系を伝授する場とはいいい得なかった。

いっぽう、GHQ/SCAP では当初から専門職図書館員の養成が意識されており、昭和 23 年(1948)夏のダウズ（Robert B. Downs）来日を契機として、東京大学に図書館学の研究機関を設立することが働きかけられた。しかし、東大では理念研究を重視する学問的な伝統が強固に存在し、図書館実務の技術的な側面に関わる図書館学はその教育体系に組み込まれにくかったといえる。総長南原繁は研究所（室）を設けて図書館学の基礎作りから始めようとしたが、学内の支持が得られた形跡はなかった。

昭和 25 年(1950)になって、民間情報教育局（CIE）図書館で働く日本人の専門職図書館員を養成するため、GHQ/SCAP はライブラリースクール創設に動き出す。専門職機関である ALA の関与のもと 6 月にはダウズが再来日し、とりあえず東大への設置が勧告された。8 月には東大、慶應義塾、京都大学の 3 大学に候補がしぼられ、主に将来図書館学を教える人びとや現職図書館員を対象に、30 単位分のカリ

キュラムを学部レベルで展開する見通しが立てられた。10月にライブラリースクール校長にギトラー (Robert L. Gitler) が就任し、最終的に彼の意向によって JLS は慶應義塾に置かれることと決まった。慶應義塾では開学以来の実学重視の精神に加え、JLS を文学部の一学科とし正規の教育体系に位置づけるなど、大学側がその運用に積極的であった。東大と対照的に、慶應義塾にはアメリカで行われている図書館学教育の形をそのまま受け入れる柔軟性があったのである。

その後、アメリカ側からの継続的な財政支援に支えられながら JLS の運営は軌道に乗る。そこでは、目録や分類をはじめとする図書館運用上の技術に加え、社会における図書館の役割を理解する視点が重視された。開設時のカリキュラムは、アメリカの典型的なライブラリースクールにおけるそれと類似しており、その後 10 年間は本質的な変更なしにその枠組みが維持されていった。そののち JLS がどれだけ戦後日本の図書館発展に寄与したかという評価については、今後の研究に俟たねばなるまい。

【発表 2】

小黒 浩司 (作新学院大学)

- 発表題名

岡松参太郎の図書館経営：京都帝大附属図書館・満鉄図書館

- 発表要旨

1 京都帝国大学の教育改革

1899 年 7 月開設の京都帝国大学法科大学 (以下法科大学) が、その創設に際し独自の教育方法を展開したことは、古くは斬馬劍禅の『東西両京の大学』、最近では潮木守一の『京都帝国大学の挑戦』などで知られている。法科大学は、ドイツの大学をモデルに、演習の重視、論文制度の導入などを試みた。法科大学はその教育の実施の過程で図書館の役割を重視した。このことも既に斬馬や潮木が指摘している。

1896 年、岡松参太郎は文部省より在外研究に派遣された。法科大学の教育改革は、彼と同期に留学を命ぜられた高根義人、織田萬、井上密の 4 名の少壮学者が中心となって推進された。彼らの主要留学先はドイツであり、留学中ベルリンにしばしば集まり、後の法科大学における教育・研究システムについて協議したことから、斬馬はこの 4 人を「ベルリン党」と称した。

2 京都帝大附属図書館と岡松

1897 年 6 月、京都帝大が創設され、木下広次が総長に就任した。彼は図書館に深い関心を持ち、附属図書館を「開かれた図書館」にする構想を抱いていた。12 月、京都帝大は島文次郎に図書館についての研究を託した。島の任務は、上記のような木下の公共図書館的な機能を兼ね備えた附属図書館の設立にあったと見られる。

しかしこうした図書館構想や人事とは関わりなく、法科大学開設のため留学中の 4 人は独自の構想に従って準備を進めていた。木下と法科大学の教官たちとの間で

は、附属図書館をめぐっても大きな隔たりが生じていた。

1902年11月、法科大学内に分館が設置され、法科大学の3教室を仮書庫として法科図書を別置した。岡松は法科大学図書主任に就任し、法科大学分館（以下分館）の充実に努めた。

法科大学は図書館を活用した教育を計画し、実行に移した。ところが創立時の事務繁多もあって購入した大量の図書の整理が追いつかず、法律関係図書を別置して、自分たちでその整理と管理を行うことにしたのである。分館の設置が想定外であったことは、法科大学の教室を仮書庫とし、閲覧室もなかった点からも明らかである。このため閲覧は本館の閲覧室で行い、分館では入庫検索と新着雑誌の閲覧のみが許可された。

3 関西文庫協会

1900年2月関西文庫協会（以下協会）が発足、翌年4月には機関誌『東壁』が創刊された。協会の活動を法科大学の教官たちは積極的に支持していた。例会では毎回のように法科大学の教官が講演を行い、欧米の先進的な図書館事情を伝えた。1901年6月の第7回例会で、木下など28名を名誉会員に推薦するが、そのなかには織田、井上、岡松、高根ら6名の法科大学教官が含まれている。

ところが『東壁』の刊行は、1902年3月発行の第4号で停止し、例会の開催も翌年6月の第14回で途絶えたと見られている。協会の活動が1902～03年頃に突然停滞した理由については定かでない。広庭基介は、協会がサロンのような空気に安住してしまったことなどを挙げている。岩猿敏生は、財政的な原因が大きかったとする。

他方この時期は、分館が設置され多数の法科大学学生が附属図書館を利用していた時期であり、日常業務があまりに多忙となったことが一因とも考えられる。

協会の例会は、14回の開催が確認されている。そのなかの法科大学教員の講演を簡単に紹介する（第7回の湯浅吉郎は除く。また1903年4月の第13回例会で勝本勘三郎が講演を行った模様であるが、その題目や内容は不明である）。

まず1900年3月の第2回例会では織田が講演を行った。その筆記録はないが、彼は「庶民図書館」設立が急務であり、英・仏・独の図書館制度からロンドンの「貧民図書館」の状況を説明した。

同年6月の第3回例会には、4月に帰国したばかりの高根が登壇した。高根はまずドイツを中心に欧州各国の図書館、次に米国の図書館、特に議会図書館、ボストン、シカゴの公共図書館について詳述した。高根は最後に、「余は関西文庫協会か此知識普及の利器たる図書館事業を盛大ならしめんために十分の尽力を切望するものなり。」と述べ、2時間をこえる講演を終える。

同年9月の第4回例会では、岡松が「専門図書館に就て」と題して講演した。彼がこの席で紹介する「プライベート・ライブラリー」こそ、岡松をはじめとする「ベルリン党」の面々が法科大学における教育上望ましい図書館と考えたと見られる。

第6回では田島が「欧州特に独逸の図書館に就て」と題して講演した。彼は大英博物館などの欧州各国の図書館、とりわけドイツ内の図書館について統計を用いながら詳しく紹介した。また同日の懇親会席上では、井上が「将来の大学は当に図書

館となるべき」との持論を述べた。

法科大学の教官たちは、欧米留学中に各国の各種の図書館を利用、あるいは視察した。彼らはそこから図書館の役割を理解し、期待を寄せた。彼らは当時の日本において最も図書館について精通した集団であったといえる。

法科大学の教育改革は、1903年5月の卒業年限短縮の実施によって、極点に到る。これを支援する図書館の体制も次第に整備され、1904年の法科大学学生の年間図書館利用者数は1万人を越えた。

だがその独自の教育は、内外からの批判によって4年足らずで幕を閉じる。1907年1月の教授会に、井上らは論文試験廃止、4年制復活などを盛り込んだ規程改正案を提案した。岡松らの修正案は否決され、井上らの改正案が可決された。改正案は評議員会の承認を経て5月から実施された。

1月の教授会を欠席した高根は、翌月で京都帝大を退官する。5月織田法科大学長が辞任し、井上が後任となった。7月1日、木下が京都帝大総長を辞任し、同日岡松は京都帝大在官のまま南満洲鉄道株式会社の理事に就任、法科大学図書主任の職を解かれた。

法科大学教育改革の挫折は、活況を呈していた附属図書館を一変させた。急増を続けていた法科大学生利用者数は、1904年を頂点に減少に転じ、1907年は前年比5割の激減であった。

- ◎ 今回の研究例会は、大学史研究会主催「大学史研究セミナー」に協賛して行われました。
- ◎ 例会のレジュメを頒布します。ご希望の方は、送料（郵券240円分）を同封し、送り先の住所・氏名を明記して、事務局まで申し込んでください。

『ニューズレター』原稿募集のお知らせ

ニューズレターの原稿を常時受け付けています。

次号（84号）掲載を希望される場合、3月末日までに別記事務局まで原稿をご送付ください。

今後ニューズレターで、図書館文化史研究に関わる文献・情報を速報していきたいと思っております。会員・非会員の問わず、関連業績を事務局までご連絡ください。皆様のご協力をお願いします。

運営委員会通信

■■ 次回運営委員会のお知らせ ■■

次回運営委員会を、下記のように開催します。本研究会の運営に興味・関心のある方は、是非ともご参加ください。なお、当日ご都合の悪い方は、別記事務局まで郵便、ファックス、または電子メールで、ご意見、ご希望等をお寄せいただければ、運営委員会で検討いたします。

記

- 日 時 3月3日(月) 13時～14時
- 場 所 東洋文庫
- 内 容
 1. 2002年度決算について
 2. 2003年度の事業について
 3. 2003年度第1回研究例会について
 4. 2003年度の研究集会について

ほか

■■ 前回運営委員会の報告 ■■

実施日：2002年11月17日

場 所：御茶ノ水・Ran Ran-Tei

以下のような事項について、協議しました。

1. 20周年記念事業報告
2. 次回研究例会について
3. 2003年度第1回研究例会について
4. 研究会規約の改定について
5. 2003年度の研究集会について
6. 学術会議登録について
7. 来年度事業の検討
8. 『図書館文化史研究』第20号の編集について
9. 『ニューズレター』第83号について
10. 会員動向
11. 次回運営委員会について

事務局だより

■■ 2003 年度第 1 回研究例会について ■■

2003 年度第 1 回の研究例会は、5 月 31 日(土)に京都大学で開催の予定です。詳細は『ニューズレター』次号でご案内します。

■■ 2003 年度研究集会について ■■

2003 年度の研究集会は、関東地区で開催の予定です。日程等が決定次第『ニューズレター』でご案内します。

■■ 会費納入のお願い ■■

2002 年度会費をまだ納入されていない方には、振替用紙と会費納入のお願いの文書を同封しましたので、至急ご送金ください。年会費は 3,000 円です。

■ ■ 会員動向 ■■

退 会

後藤 純郎 2002 年 11 月ご逝去。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新入会

転居・所属変更